

球形スピーカーQ-440 妙高オーディオクラブ発表会に参加



球形スピーカーQ-440を持って、妙高オーディオクラブ主催の発表会に参加してきました。



スピーカーユニットはJBL LE8T（径20cmフルレンジ）一応アルパインのツイーター（カーステレオ用？）もコンデンサのみで組み合わせました。



LE8Tは高域がちょっと、とか言われない為の予防策（しかも見た目！！）だから多分効いているだろう程度で、細かなチューニングは行っていません。



妙高オーディオクラブの発表会参加を決めてから球の中に入れる吸音材だとか、吸音処理の方法を何種類か試しました。



平行してバスレフダクトのチューニングもあれこれやってみました。
ダクトパイプを球の中に置くのと、外に出っ張らすのでは、も試してみました。
どちらでも同じ？！ではなく、どうも外付けの方が素直な音に聞こえました。

ダクトの長さのチューニングも、短くすればしたなり、長さを変えれば変えた分違いが出る、同時にバスレフ方式による付帯音の元となることも実感。

そこで低域を意識した（増幅？量感？）チューニングよりも、バスレフのクセをなるべく

出さないよう（聞こえないように）ダクト寸法をウンと長く取って、とても響かない（音として聞こえにくい）であろう低域に追いやる寸法にしてみました。



バスレフダクトの出入口には、ファンネル加工を施した、風切り音を減らす目的もあるのですが、消音の為の“バフ”をしっかりと固定するのに具合のいいフランジ形状も兼ねています。



出入口にバフを取り付けることで、ダクトパイプの中の響きをうまく打ち消すことができました。



ここまでの音出しは、バツフルなしのスピーカーユニット丸見え状態でやっていたのですが、一応見栄えを気にして、発表会当日にはバツフルを付けるつもりで準備していました。

しかし出掛ける二日程前になって装着してみると、音がアレッ！ンッ？気のせいかなと思いつつ一応会場にはそのまま持ち込み、音出しテスト。

それでもやっぱりおかしい、ということでリングを残してバツフルは外しました（音波の回折効果に影響しているのか？）

それでもやっぱりおかしい、ということでリングを残してバツフルは外しました（音波の回折効果に影響しているのか？）



会場で鳴らした時のアンプは、この日参加の F 田さんの元祖フタマン 12B40TL の真空管アンプをお借りしました、ありがとうございました。音量やや控え目にして皆さんに聴いていただきました。



この日ドーンとステージに置かれていたスピーカーはアルテックの A7、他の参加者のスピーカーサイズも負けず劣らず大きい、球形スピーカーの直径は 44 cm、決して小さなサイズではないが、会場の広さも手伝って一番小さく見えた。音量を無理に大きくしても足りないのは目に見えているので、スピーカーが心地良く鳴る大きさにした。

えているので、スピーカーが心地良く鳴る大きさにした。

静かな分この日一番やさしい音で聴いてもらえたのではと勝手に思っている。
マスターリング前の音源を聞かせてもらったり、励磁スピーカーの音を聞かせてもらったり、真空管アンプのそれぞれの力作を聞かせてもらったりと実りの多い発表会だった。